

AFC7 円卓会議

モンゴルと中央アジアにおける文化と資源の越境

主催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会(SGRA)

2024年8月10日(土) 11:00~12:30

言語：日本語

会場：チューラーロンコーン大学 501-9&11 教室

主 旨

本セッションは、ユーラシア大陸の内陸地帯に位置するモンゴルと中央アジア諸国にスポットを当てることによって、その歴史的、文化的な横のつながりを、近年の動向に注目しながら議論するものである。

ユーラシア大陸の諸問題は、往々にして中国とヨーロッパという東西の二つの軸を中心に取り上げられがちであり、二つの軸をつなぐ内陸ユーラシア地帯の国家と民族間の横のつながりが見落とされてきた。これらの地域は、歴史的にも東西交流の中継地帯として重要な役割を果たしてきたが、近現代以降はロシアと中国の地政学的力学に巻き込まれ、国際関係上複雑な状況に置かれている。その複雑さの根源には、これらの地域に対するソビエトと中国の二大社会主義勢力の長きにわたる統治の遺産があり、現在のウクライナ戦争に象徴される内陸アジア地域の少数民族をめぐる不安定性がどのような経緯で形成されてきたのかを理解することが求められている。

これらの問題を理解するにあたり、本セッションの特徴は、大国と中央アジアとの関係を分析の中心に据えつつも、西はトルコ、東はモンゴルまで、広域にわたる諸民族間の歴史的関係性にも目をむける点にある。歴史的に、内陸アジアのほとんどの民族と国家は、モンゴル帝国と何らかの繋がりをもっている。内陸アジアの東端に位置するモンゴル国から、現在ウクライナ戦争に巻き込まれている地域に分散居住する民族集団の相互交流が、それぞれが所属する勢力圏にどのような影響をもたらしてきたかを整理することは、近現代以降の「東西交流」を理解する上で重要な側面であると考えられる。本セッションでは、こうした問題意識をもって中央アジアとその周辺地域の人々の文化的および社会的相関関係を幅広く取り上げる。

プログラム

総合司会：廣田千恵子（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

11：00 趣旨説明 ブレンサイン（滋賀県立大学人間文化学部）

11：05・基調講演

ロシア・ウクライナ・中国におけるアイデンティティ、紛争、

そして「戦争多文化主義」

ウラディン ボラグ(ケンブリッジ大学教授)

本発表は、ロシア、ウクライナ、そして中国における紛争の複雑な側面を探ることを目的としており、特に中央アジアと内陸アジアの人々の関与と「戦争多文化主義」の出現に焦点をあてる。ロシアの言説は、ウクライナに対する戦争を、ナチス化への反撃として正当化しているが、西側はこの衝突を、ロシアの全体主義とウクライナの民主主義の間のイデオロギー闘争としてみる傾向がある。しかし、本稿では、ロシア軍がチェチェン人、カルムイク人、ブリヤート人、トゥヴァ人、ヤクート人など中央アジアや内陸アジアの少数民族を動員し、ウクライナ軍が多様な欧米連合体から支持を得ているなど、両国に異なるイデオロギーと人種構成を特徴とする多文化主義の様子を呈しているところに注目したい。本稿ではさらに中国の状況とも比較したい。つまり、中国と西洋、そして日本との関係が緊張する中で、内陸アジアの少数民族(主にモンゴル族、ウイグル族、チベット族)が、想像された「中華民族」の構成員として見られている点、そしてそのプロセスの中で、中国文化と文化的異質体という相矛盾する体験をしている点に注目したい。「戦争多文化主義」という概念の中核にあるのは、中央アジアと内陸アジアの人々が紛争に果たしている重要な役割である。彼らがロシア軍に加わったことにより、モンゴル帝国の歴史的文脈に根ざしたプーチンのユーラシア帝国主義というウクライナの主張が成り立っている。同時に、これらの少数民族は、ロシアの「ルーシ」と、中国の「中華」というより広範な文明的・国家的アイデンティティの形成に貢献し、ロシアを戦争状態におき、中国をグローバル紛争に備えた状態においている。そこで本稿の目的は、こうした多面的なダイナミクスを分析し、地政学的な文脈におけるアイデンティティ、紛争、多文化主義の交錯を解明するとともに、平和の可能性について考察することである。

11 : 30 研究発表 1

現代に根差すトルコ共和国の中央アジアとモンゴルという「故郷」

メレキ・カバ(チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学)

トルコの歴史教科書において突厥碑文がトルコ系諸民族の歴史の最初記録とされアジア大陸の中心に対して特別な意識が持たれている。一方で中央アジア諸国は同じチュルク系民族として「同胞」認識がある。またソ連崩壊後に中央アジア諸国は「救済」され経済的可能性も再発見された地帯である。本発表では以下について発表する。

- ① トルコ共和国におけるモンゴルに対する認識を歴史的な流れに沿って俯瞰する。
- ② 冷戦時代以降のトルコと中央アジア諸国の政治的・経済的な関係を主に 1990 年から 2000 年の間の動きを視野に入れて考察する。
- ③ 現在のウクライナ戦争でのトルコの役割とクルミアタタールについて分析する。

11 : 45 研究発表 2

モンゴル国カザフ人の壁掛けトウス・キーズにおける模様デザインの特徴

—社会主義期の人・モノ・情報の越境を探る手掛かりとして—

廣田千恵子(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)

19 世紀末以降にアルタイ山脈北部に移住しモンゴルの国民となったカザフ人が、社会主義期に作った壁掛けトウス・キーズの模様デザインは、モンゴルよりも、むしろウズベクやクルグズのもの共通している。この背景には、1950 年代以降モンゴルのカザフ人が留学や出張のためロシア・中央アジア地域を訪れた際に、当地の壁掛けや茶器などを購入し、持ち帰ったことが影響している。

本発表では、モンゴル国内のカザフ移民社会の中で作られた壁掛けの模様デザインと、中央アジア地域の様々なモノの模様デザインとの共通性の分析をつうじて、社会主義期の人・モノ・情報の越境の活発さがソビエト全体の文化的流行や美意識を構成していった様子を報告する。

モンゴル国と中央アジア諸国との経済関係

ネメフジルガル (モンゴル国科学アカデミー)

1990年まで、モンゴル国は圧倒的に旧ソ連との関係で経済を運営してきた。体制転換以降のモンゴルは、中国とロシア両隣国との良好な外交関係を維持しながら世界各国との経済関係の拡大を目指してきた。近年は特に中国との貿易量は増加し続けている。旧ソ連圏の中央アジア諸国はモンゴルとの地理的距離が近いという点、同じく転換後の後遺症や過度の資源依存などの問題も抱えている。モンゴルと中央アジア諸国は互いの経済貿易関係を拡大させるとともに、中国という巨大市場での地位を争う面もある。中国とロシアの資源貿易、中国とヨーロッパの陸上貿易などもモンゴルと中央アジア諸国の経済関係を複雑化している。

登壇者

URADYN Bulag ウラディン ボラグ 基調講演



ケンブリッジ大学社会人類学科教授。雑誌「Inner Asia」の共同編集者。主な著書に *Nationalism and Hybridity in Mongolia* (1998), *The Mongols at China's Edge* (2002), and *Collaborative Nationalism* (2010), などがある。比較民族学とナショナリズムの視点から中国と内陸アジアにおける社会主義やポスト社会主義時代の政治形態と想像的な関係性を研究対象としている。最新の著作として *A Chinese Rebel beyond the Great Wall: The Cultural Revolution and Ethnic Pogrom in Inner Mongolia* (2023). (共著) がある。

ブレンサイン 総括



滋賀県立大学人間文化学部教授。2001年に早稲田大学大学院文学研究科東洋史専攻博士号(文学)取得。日本学術振興会特別研究員や東京経済大学、中央大学、早稲田大学非常勤講師を経て、2006年から現職。主な著書：『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』(2003)、『境界に跨るモンゴル世界—20世紀の国家と民族』(2009)、『内モンゴルを知るための60章』(2015)。渥美国際交流財団2002年度生。



廣田千恵子 (ひろたちえこ) 総合司会および発表

博士（学術）。現在日本学術振興会特別研究員 PD（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）。専門領域は文化人類学、地域研究（モンゴル、中央アジア）。主な研究テーマは中央ユーラシア・カザフ人社会における装飾文化の動態の解明。とりわけ牧畜社会における手工芸技法やものづくりの動機などに関心をもつ。2022 年度渥美国際交流財団奨学生。



KABA_Melek カバ・メレキ 発表

トルコ共和国チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学日本語教育学部助教授。2011 年 11 月に筑波大学人文社会研究科文芸言語専攻博士号（文学）取得。白百合女子大学、獨協大学、文京学院大学、早稲田大学非常勤講師、トルコ大使館文化部／ユヌス・エムレ・インスティトゥート講師、トルコ共和国ネヴシェル・ハジュ・ベクタシュ・ヴェリ大学東洋言語東洋文学部助教授を経て 2018 年 10 月より現職。渥美国際交流財団 2009 年度奨学生。



ネメフジルガル 発表

モンゴル国科学アカデミー研究員。
2009 年亜細亜大学大学院経済学研究科博士号取得。
2008 年度渥美国際交流財団奨学生。

問合せ先：AFC 事務局 afc2024@aisf.or.jp